# 国際サンスクリット合宿への参加とシェムリアップ近郊遺跡群の調査

文学研究科　修士課程　1 年
大木　舞
カンボジア
2019 年 1 月 4 日～2019 年 1 月 13 日

## 計画の概要

報告者はヒンドゥー教の図像を専門としており、特に古代から中世における、ヴィシュヌ神やシヴァ神といったヒンドゥー教の神々の神像彫刻や浮彫りに焦点を絞って研究している。研究手法としては、美術・考古資料と文献資料を併用した図像学研究を志している。というのも、美術資料は作例単体では情報に乏しく、制作年代や背景等も不明なことが多いが、文献資料を併用してその不足を補うべく努めることで、より多角的な視野に立った研究が可能になると考えているからである。美術資料と関連の深い文献資料としては第一に、彫刻や浮彫り等に付記された碑文資料が挙げられる。碑文資料を読み解くことにより、作例の制作年代や背景といった新たな手掛かりが得られ、神像などの作例のみからは見えて来なかった、政治的・文化的背景までも含む美術資料に対する総合的なアプローチが可能になる。よって、碑文資料を扱えるようになることは報告者の目指すヒンドゥー教図像学研究に不可欠であり、研究キャリアの初期段階から意識的に研鑽を積むことが肝要であると考える。

このような目的のもと、報告者は 2019 年 1 月 4 日から 13 日にかけて、カンボジアのシェムリアップにおいてフランス極東学院（École Française D’extrême-Orient, 略称 EFEO, 以下この略称を用いる）が主催した第 10 回国際サンスクリット合宿（the Tenth International Intensive Sanskrit Reading Retreat, 略称 Sanskrit Retreat, 以下この略称を用いる）に参加すると共に、シェムリアップ近郊遺跡群にて浮彫りを中心とする美術資料の調査を行った。

## 成果

まず、Sanskrit Retreat に関しては、同じ渡航期間中に浮彫りなどの美術資料を精密に調査しなければならない時間的制約から、特に報告者の目的に合致すると思われる一部のプログラムに絞って参加した。Sanskrit Retreat で取り扱う文献は 1. インドの哲学・論理学文献、2. インドの美文体文学、3. クメール碑文資料（古代クメール文字で表記されたサ

ンスクリット語資料）の三種類であったため、3. クメール碑文資料の講読に参加した。シェムリアップにはサンスクリット語（古代インド語）で書かれた碑文が豊富に残されており、EFEO はカンボジアが仏領インドシナであった植民地時代からサンスクリット語の碑文資料を研究して来た長い伝統を持ち、この点こそが今回の Sanskrit Retreat の特色であり、報告者が参加した動機でもあったからである。Sanskrit Retreat は、シェムリアップ近郊のヒンドゥー教・仏教寺院などの遺跡にバスで出向き、浮き彫りや建築構造などを見学し、碑文が残存する場合にはじっくりと実見して専門の研究者が解説を行い、野外で文献を読むというスタイル（写真 1 参照）と、EFEO のオフィス（写真 2 参照）で机に座って読むというスタイルの二通りを組み合わせて行われた。文献の読み方に関してはどちらも輪読スタイルをとり、参加者一人一人が少しずつ訳をして読み進め、司会者が随時解説を行うという方式がとられた。参加者の国籍は多様であり、フランス、ハンガリー、インド、ネパール、カンボジア、アメリカ、ドイツ、イタリア、日本などであり、この機会を通じて初めて言葉を交わすことの出来た参加者が多かった。

次に、シェムリアップ近郊遺跡群にて浮彫りを中心とする美術資料の調査については、Angkor Wat（アンコール・ワット）、Bayon（バイヨン）、Banteay Srei（バンテアイ・スレイ）、 Kbal Spean（クバール・スピアン）、Prasat Kravan（プラサット・クラヴァン）、Neak Pean（ニャック・ポアン）、Beng Melea（ベン・メリア）、Lolei（ロレイ）、Preah Ko（プレア・コー）、 Bakong（バコン）、 Baphuon（バプオン）の計 11 の遺跡と、Angkor National Museum（アンコール国立博物館）、 Preah Norodom Sihanouk-Angkor Museum（プレア・ノロドム・シハヌーク・アンコール博物館、通称イオン・シハヌーク博物館）の 2 つの博物館にて行なった。本助成金の申請時、報告者は修士論文にてハリハラ像（ヴィシュヌ神とシヴァ神を融合させた像）の図像と神話を扱うことを計画していたが、その後主指導教員との相談を経て、ヴィシュヌ神の化身に関する図像と神話を扱う計画に変更した。よって、今回の調査でもヴィシュヌ神とその化身に関する浮き彫りや神像などの作例の調査を重点的に行なった。

報告者は「美術資料と関連の深い文献資料としては第一に、彫刻や浮彫り等に付記された碑文資料が挙げられる。碑文資料を読み解くことにより、作例の制作年代や背景といった新たな手掛かりが得られ、神像などの作例のみからは見えて来なかった、政治的・文化的背景までも含む美術資料に対する総合的なアプローチが可能になる」と考えていたが、現地調査を行うと、碑文資料そのものの編年の問題が浮かび上がり、より慎重な検討を要することがわかった。とはいえ、浮き彫りなどが彫られ、作例が残されている祠堂に碑文資料が残されていることは、銘文資料などを欠く単体の作例より豊富な情報を提供し得るのも事実である。Prasat Kravan というヴィシュヌ派寺院などがそれに当たる（写真 3, 4 参照）。ヴィシュヌ神像に関しては、アンコール国立博物館に所蔵されているプレ・アンコール期の四臂ヴィシュヌの作例（Phum Kamreang, Kandal province, Phnom Da Style, 6 世紀頃, 砂岩）のように、中央のヴィシュヌ像の頭から両手に向けて物理的な支柱が彫り

残されている点が興味深かった。このような個別的な点を挙げれば切りがないが、全体としてはヒンドゥー教図像の本拠地であるインドから離れたこのクメールの地で、如何にヒンドゥー教図像が表現されていたかを碑文資料と共に実見し、多少なりともクメール美術に対する眼を養うことが出来たのが最大の成果であった。

写真 1 野外での輪読風景

写真 2 EFEO のオフィス

写真 3 Prasat Kravan の碑文

写真 4 Prasat Kravan のヴィシュヌ神の浮き彫り